

NHK高校講座における放送教育の研究
－「スモールステップ法」導入による学習効果－

NHK学園高等学校

鈴木 祐 宮坂 恵美子 鈴木 彩日

I はじめに

本校においては、生徒は日常「NHK高校講座」の放送を視聴することにより、スクーリング出席時間数の減免を適用している。そのことにより、毎日の登校が難しい生徒も無理なく学習を進めることができ、単位を修得して卒業を手に行っている。「NHK高校講座」の視聴は本校の学習の生命線でもある。この学習方法による実績のもとに、本校では基本方針としてNHKの放送番組を一層活用した学習活動の展開を検討、実施していくこととしている。

2022年度からはこの基本方針をふまえ、新カリキュラム科目から「NHK高校講座」とレポートとの連動とした教材設計を進め、放送回に応じてレポート課題を細分化して学習を進める「スモールステップ法」を導入している。

II 本校の概要

1. 沿革

NHK学園高等学校は、昭和38年にわが国で初めての広域通信制の高等学校として開校し、2022年度に創立60周年を迎えた。高等学校通信制課程の本校を東京都国立市に置き、北海道から沖縄まで全国40ヶ所以上のスクーリング会場を設置している。

面接指導は東京本校、協力校、指導施設の他、集中スクーリングで行っている。また、併修生、特科（教養コース）を併置している。

生徒の多様な学習スタイルにあわせて、本校では「スタンダードコース」「ライフデザインコース」「登校コース」を設置している。

日常はテレビやラジオやインターネットでNHK高校講座の放送を視聴しながら、月々にレポートを提出し、決められたスクーリングに出席し、定期試験を受けて単位を修得していくシステムである。レポート提出は、インターネットおよび一部の科目については郵送で行っている。時代の要請にこたえて、新しい教育方法の開発とNHKの放送番組の利活用を積極的に進め、本校の存立の使命を果たすべく、研究開発を進めている。

本校は、学習意欲のある人に対して、のびのびと学習できる機会を提供し、自ら学ぶ心と自主性を育成して、生涯学習時代に対応できるような学習指導を推進している。また、能力・適性・進路・興味・関心が多様化し、学力に幅がある現代の生徒の実態に合わせ、個性を尊重し、個人差に応じて柔軟に対応しながら、学ぶ意欲を高め、基礎的な学力を確実に身につけることを主眼とした学習指導を推進し、全体的な教育水準の向上に努めている。これまでに81,100人を超える卒業生を送り出してきた。

現在は、約3000人の生徒が、全国、そして世界各地で学んでいる。生徒層は年齢的にも幅広く、中には大勢の中での学習が苦手な生徒や、海外でスポーツ活動や芸術活動をしながら学習する生徒も在籍している。

2. スクールミッションおよびスクールポリシー

スクールミッション

NHKと連携し、放送やインターネットなどの多様なメディアを利用することで、学ぶ意欲と高校卒業の意思を持つ人に、「いつでも、どこでも、だれにでも」学ぶ機会を提供し、自立して未来を生き抜くための基盤となる力を身につけていく学校

スクールポリシー

グラデュエーションポリシー（育成をめざす資質・能力に関する方針）

私たちは、本校に入学した生徒一人一人に、以下の資質・能力を育てていきます

- 基礎・基本の学力（知識・技能）と生活習慣、自学自習の学習スタイル
- 自分で考え、選択し、表現できる力（主体的に思考・判断・表現できる力）
- 自分を理解し認めることができる力（自己理解と自己肯定の力）
- 他者を理解し尊重できる力（他者への想像力と共感力、寛容の精神）
- 社会の中で自らの役割を見出し、多様な人々と関わり協働できる力（社会性とコミュニケーション力）

カリキュラムポリシー（教育課程の編成及び実施に関する方針）

私たちは、以下の方針に基づいて教育課程を編成します（「学びの内容」）

- 基礎・基本となる学力が身につく科目を中心に編成すること
- 主体的な学びを促し、コミュニケーション力を高めるための学校独自の科目等を設けること（「総合的な探究の時間」の拡充、メディアリテラシーとコミュニケーションスキル）
- 生徒が「やりたいこと」に出会えるよう、その多様なニーズ（多様な選択）に応えられる学びの場を提供すること
- 生徒が自己理解にもとづき積極的に進路を選択、決定できるよう、さまざまな指導機会を設けること

私たちは、以下の点に特に力を入れて教育活動を実施します（「学びの方法」）

「自学自習」を実現するために、「NHK 高校講座」視聴、レポート課題、スクーリング、オンライン支援を効果的に結びつけた指導計画を策定・明示して、生徒を指導すること

- 生徒の自由を尊重しつつ、オンライン学習システムも活用して、生徒一人一人の学習活動を的確に把握し、対面やオンラインでの「声かけ」と「見守り」を通じて学習継続を支援すること
- 日常のレポート課題、年度途中の学習効果測定、さらに定期試験を通じて、学習意欲を引き出す適切な評価をすること
- 生徒を取り巻く環境に目を配り、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーとも連携して、チームによる学習支援を推進すること

私たちは、以下の点に力を入れて教育方法の改善を図ります（「新たな学びの開発」）

ICTの更なる活用やNHKの番組制作者との更なる連携によって、個別最適な学習指導・支援のための新たな方法を開発すること（学習ログの活用など）

- 広域通信制ならではの全国の生徒がつながることができる教科指導や特別活動の新たな形を開発すること

アドミッションポリシー（入学者の受け入れに関する方針）

私たちは、以下の内容を満たした生徒といっしょに学んでいきます

- 学びたい、高校を卒業したいという意欲と意思があること
- 放送やネットを活用した本校の自学自習の学習の形を十分に理解し、それに取り組む意思があること
- 他者を尊重し、多様な価値観を認め合おうという気持ちがあること

Ⅲ 研究内容

1. これまでの経緯と変更点

2021年度までは、複数の「NHK高校講座」を視聴して1通のレポートを完成させ、提出するスタイルをとっていた。

2022年度開講の新カリキュラムの科目からは、1回の「NHK高校講座」を視聴し、その範囲で放送された内容のレポート課題に取り組み、完成させ提出する。これを1つの「ユニット」という単位で区切った。1つのレポートは、1から9個のユニットで作成することができる。生徒は各ユニットを全て提出することで、1回分のレポートを提出したと認められるスタイルに変更した。また、従来はテレビやラジオ・番組のホームページ上で視聴をしていた「NHK高校講座」を、本校の学習専用サイトである「N-gaku Online Space（以降、NOS）」で視聴できるようにし、視聴することによって、関連のレポート課題が表示され取り組めるようになるしくみにも変更した。

ユニット7つの場合のスマールステップ例

The image displays three pages of a report, each representing a different 'Unit' (ユニット) from a series of seven. The pages are titled 'ユニット1', 'ユニット3', and 'ユニット7'. Each page contains a structured layout with various sections, including text, diagrams, and tables. The 'Unit 1' page shows a table with columns for '目的', '形式', and '内容'. The 'Unit 3' page features a diagram with a central box and surrounding text. The 'Unit 7' page includes a table with columns for '目的', '形式', and '内容'. The pages are designed to be clear and organized, reflecting the 'Small Steps' method of learning.

これまでは、1つのレポートを提出するために3～6本のNHK高校講座を視聴し、教科書数十ページの範囲の学習をまとめて行うイメージで、学習者にとってはかなりの負担が感じられた。そこで、スマールステップ法（細分化）を導入することにより、生徒は「NHK高校講座」1回分を着実に視聴して、その内容に関連するレポート課題に取り組み、提出できるようにした。このようにスマールステップでの学習を積み重ねることにより、大きな課題をクリアできる。このように、少しずつ課題に取り組み達成感を得ながら学習進めていくことが自信にも繋がっていくと考え、「スマールステップ法」を導入することとなった。

今回の研究、調査にあたり、下記の推測・仮説を立てた。

「NHK高校講座」視聴のスマールステップ法（レポートの細分化）の導入により、学習意欲と学習効果が向上する。

本研究では、この仮説をもとにレポート内容を改変した。その結果について、アンケート調査および旧来型レポートと細分化レポートとの評価比較を行い、その効果、課題等についての考察を行った。

2. レポート内容の改変例（英語 C I）

レポート内容の改変例について、「英語 C I」の科目を取りあげていく。スマールステップ法導入により、1つのレポートを複数ユニットに分けるなかで、一度に取り組む問題量が少なくなる他、新カリキュラムの学習評価に対応した課題構成にしたことにより、生徒の学習効果を期待する問題を取り入れている。

ここでは、英語 C I で学習効果を期待し取り入れた問題について、3つの事例をあげ、それぞれの事例の学習効果について考察する。

（事例1）放送内容に基づいたレポート問題について

各放送回の内容にもとづき、学園オリジナルのレポート課題を出題している。

【例】

「スマールステップ法」導入前は、最初に放送視聴課題がまとまっていた。

2021年度 コミュニケーション英語Ⅰ 第2回レポート	
放送期間 6/30（9月1日）～9月15日（11/15） 単元 Lesson 2 My Favorite Hero Lesson 3 Cool Culture from Japan 評価 批評 添削者	
I 放送による問題 「コミュニケーション英語Ⅰ」の放送（Eテレ 毎週月曜日/午後2時40分～3時）のなかで「美しい地球儀マーク（ジングル音がかかります）」が出ている箇所を取り上げる英語を書き取る問題。 ※書き取るのは英語の部分のみです。 ※放送時間は異学年向けに短縮されたものを使用する場合があります。	
<h3>放送視聴課題</h3>	
II 【リスニング問題】 これからA～Dの4つの英文を読み、それぞれの絵に合う英文の記号を（ ）に書きなさい。（CD Tr.15）	
1.  2.  3.  4. 	
III 【リスニング問題】 次に読む4つの英文がLesson 2の内容に合っているか（True）を、合っていない場合はF（False）を○で囲みなさい。（CD Tr.16）	
1. (T F) 2. (T F) 3. (T F) 4. (T F)	
IV Lesson 2の内容に関する英文を読み、各問に答えなさい。 At thirteen, Nishikori Kei entered a famous tennis school in the US. He didn't understand English at first, so he had a tough time. However, he focused on tennis and practiced hard. He became a professional player at seventeen. In the picture, Kei is (1) _____ high and (2) _____ the ball hard. He's (3) _____ very aggressively. Now, many people around the world know this great athlete's name.	

1. 二重下線部とは同じ意味になるよう、次の英文の空欄に適切な語を書き入れなさい。 When Kei _____, _____ (play / hit / jump)	VI 以下の各問に答えなさい。（学習ノートLesson 2 Target 参照） 1. 次の（ ）内からふさわしい語を選び、○で囲みなさい。 (1) We (are / were) playing cards now. (2) Nami (is / was) studying Spanish last night. (3) He (is / were) washing the dishes in the kitchen now. (4) Ami and Ken (was / were) talking on the phone yesterday.
2. (1)～(3)に入るふさわしい語を下から選び、適切な形に直して下線部に書き入れなさい。 (play / hit / jump)	2. 日本語の意味に合うように、下線部に適切な語を書きなさい。ただし、文頭は大文字にする。 (1) _____ you _____ a letter to your parents? (あなたは両親に手紙を書いているのですか。) (2) We _____ to her songs last night. (昨夜、私たちは彼女の歌を聴いていました。) (3) She _____ after her dog. (彼女は犬を連れて走っています。) (4) It _____ this morning. (今朝、雪が降っていました。) VII 以下の各問に答えなさい。（学習ノートLesson 3 Target 参照） 1. 次の各英文の下線部は文法的に関連しています。正しく置して右の下線部に書きなさい。ただし英文の意味は大きく変えないこと。 (1) Lucy can <u>plays</u> the violin very well. _____ (2) What is Mike going to <u>doing</u> this Friday? _____ (3) You should <u>waiting</u> for Jim. _____
3. 英文に関する下の質問の答えを完成させなさい。 (1) Did Kei have an easy time in the US at first? _____, he _____. (2) When did Kei become a professional player? _____ At _____. V Lesson 3の内容に関する英文を読み、各問に答えなさい。 Japanese manga are very popular among kids and adults in Australia. People in France (1) _____ enjoy them in French. Actually, people around the world enjoy Japanese manga in many languages. Last year, Sophie bought some manga at Japan Expo. Japan Expo is a big annual event in France. People can experience Japanese culture such as manga, music, and fashion. Many young people <u>wear costumes like anime characters</u> and they look so <u>kawaii</u> ! People can experience similar events in Australia, too. One of them (2) _____ be next month.	2. それぞれの対話が成り立つように、ふさわしい語句を○で囲みなさい。 (1) A: When will you become fifteen years old? B: I (will / can't / must not) become fifteen years old next month. (2) A: I got a bad score on the English test. B: You (must not / should / can't) study harder next time. (3) A: I left my textbook at home. B: Don't worry. You (won't / can / must not) use mine.
4. 英文に関する下の質問の答えを完成させなさい。 (1) What are very popular among kids and adults in Australia? _____ are. (2) What did Sophie buy at Japan Expo last year? _____ She _____ some _____ there. (3) What is Japan Expo? _____ It is a big _____ in _____.	VIII 日本語の意味に合うように、下線部に適切な語を書きなさい。（学習ノートLesson 3 このお楽しみも注目！）参照 1. He is _____ the most popular violinists in Japan. (彼は日本で最も人気のあるヴァイオリニストの一人です。) 2. Mark likes sports _____ baseball, basketball, and tennis. (マークは野球、バスケットボール、テニスなどのスポーツが好きです。) 3. Hiroshi will dress _____ like an anime character. (ヒロシはアニメの登場人物のように衣装をするつもりです。) VIII 日本語の意味に合うように、下線部に適切な語を書きなさい。

スモールステップ法導入後は、放送視聴課題を各ユニットに散りばめている。

スモールステップ法導入により、放送視聴後にその放送内容に紐づいた問題に取り組むことができるようになった。これにより、1つのターゲットを1つのユニットに収めることで、文法事項の反復学習などができるようになり、より知識が身につくことが期待できる。また、生徒のレポートの取り組みからは、おおむねの生徒が理解できている様子であった。

(事例2) 放送内容の重要フレーズ出題について

教科書内容とは別に、日常生活で使える場面のフレーズについてレポートで出題している。

【例】

<p><放送></p> <p>～NHK 高校講座 第5回放送～ 「過去の状態について説明してみよう」</p>	<p><課題></p> <p>放送の中で、「あなたのスマートフォンは、キッチンの上にあります」と英語でいう時、どのように表現するでしょうか。()にあてはまる語を入れなさい。</p> <p>Your smartphone () on the table () the kitchen.</p>
--	--

このような表現を覚えることにより、日常で使う表現を覚えることができる。生徒からの感想として、「教科書以外の表現を知ることができてよかった」「日本語でもよく話している内容を英語で伝えるとき、どうやって文を作るのかのヒントになった」などの意見があった。

（事例3）放送内容での表現分野出題について

スクーリングでは、1コマ50分で1レッスンを完結しなければならない。そのため、本文内容理解、文法事項を指導することなどに時間を要することで、生徒が表現する時間が十分にとることができない。そこで、放送内容より、コミュニケーションに関する部分を課題として出題することによって、生徒が表現できる場を作った。

【例】

<p><放送> ～NHK 高校講座 第2回放送～ 「自己紹介をしてみよう」</p>	<p><課題> 英語で自己紹介をしてみましょう。 「名前」・「出身地」・「好きな食べ物」・「その他ひとこと」をそれぞれ書いてみましょう。</p>
---	--

生徒の取り組みについて、ほぼすべての生徒が英語で自分自身のことを表現することができていた。また、「その他ひとこと」について、自分の趣味や行きたい場所など自由に書くことができていた。中には文法の誤りやスペルミスなどがあったが、レポート内にコメントを付し、より良い表現の仕方を提示するなどの指導をしている。

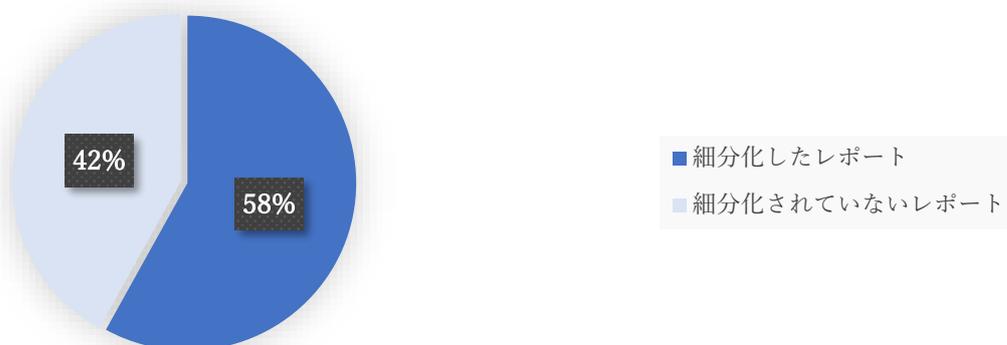
3. アンケート調査

調査対象

「スモールステップ法」の導入が既に終わっている科目（1年次生の科目）と、従来のレポート単位で取り組む科目（2・3年次生の科目）を混在で履修している生徒、81名にアンケートを実施した。

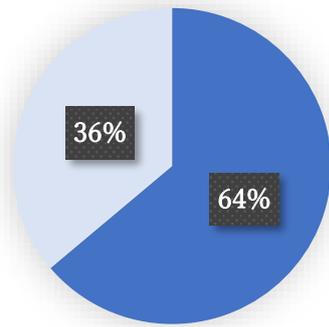
結果

Q1 細分化したレポートと、されてないレポート、どちらが取り組みやすいですか。（81名）



Q2 細分化したレポートが、取り組みやすい理由は何ですか？

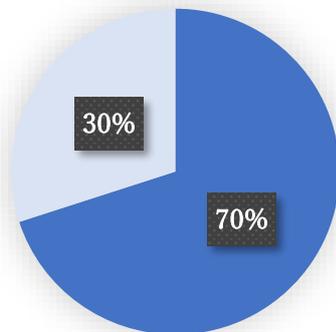
(Q1で「細分化したレポート」を選んだ47名)



- 1ページの問題の量が少なくなり、気軽に取り組める
- 高校講座を見て、その高校講座に対応した問題が出題されている

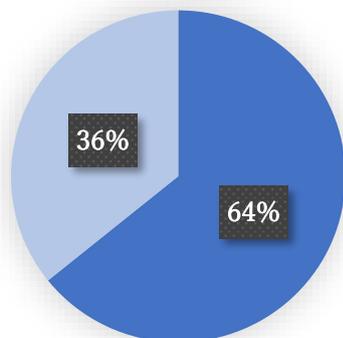
Q3 気軽に取り組める理由は何ですか。

(Q2で「1ページの問題の量が少なくなり、気軽に取り組める」を選んだ30名)



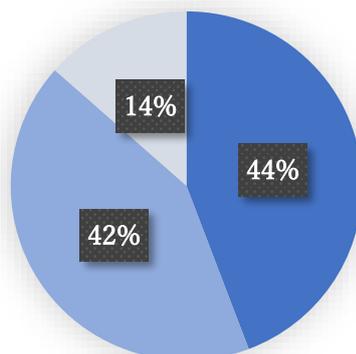
- 集中力が持たない
- 隙間時間（移動時間やバイトの休憩時間）で、レポートに取り組みたい

Q4 細分化したレポートは、学習内容の把握がしやすいですか（81名）



- 把握しやすい
- 把握しにくい

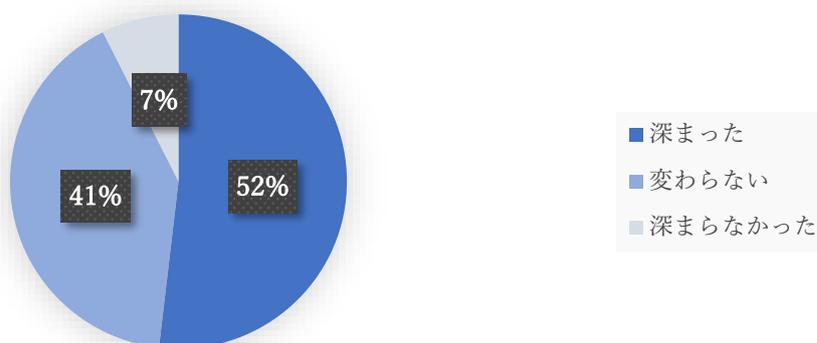
Q5 学習内容を把握しやすい理由をお聞かせください。(Q4で「把握しやすい」を選んだ52名)



- 高校講座の内容ごとにレポートが細分化されており、理解しやすい
- 学習内容が絞られており、理解しやすい
- 集中して取り組めることができるので、理解が深められる

Q6 オンラインスペース内で高校講座が視聴できることで、学習内容の理解が深まりましたか。

(81名)



Q7 学習理解が「深まった」という方への質問です。なぜそのように感じますか。

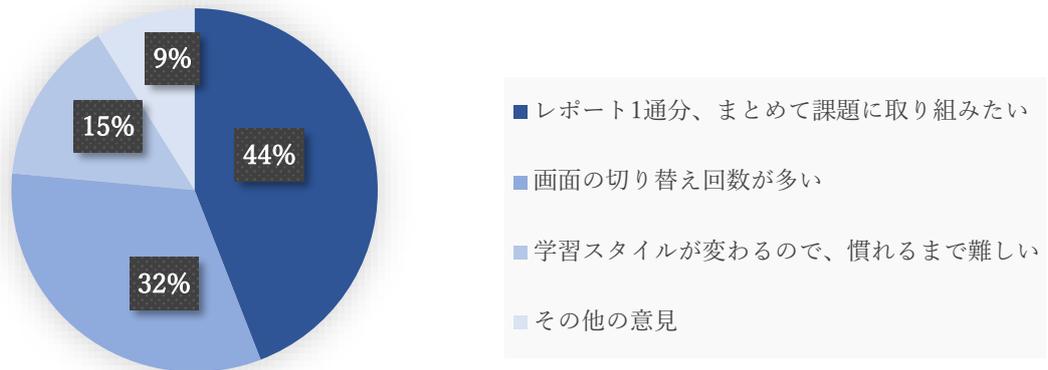
- ・高校講座とレポートの内容がリンクしているので分からない所があった時にすぐ番組を見られる。
- ・高校講座を今までよりも深く見るようになることで、高校講座の内容をレポートの内容と紐づけやすくなった。
- ・声（音）を聞いて考えるのと、自分で読むのを合わせると内容が頭に入りやすいから。
- ・レポート取り組み時に、その都度合った単元の放送をHPへアクセスする手間を省いて見返せるから。
- ・レポートの内容が講座と照らし合わせてわかるので理解が深まったとおもいます。
- ・どの内容をやっているのかの把握はしやすい。
- ・インプットからのアウトプットがやりやすくなった。
- ・数学が苦手な自分にとっては、一度に放送を見てもどの解法を使用すれば良いのか混乱してしまうことがあったため、細分化されたことによりユニットごとの学習内容が目に見えるようになったため。

Q8 「変わらない」「深まらなかった」を選んだ方に質問です。なぜそのように感じましたか。

- ・放送内容は同じなので。また、自分は普段「NHK高校講座」ホームページの「文字と画像で見る」を開きながら放送視聴をしています。なので NOS 上で視聴できても結局ホームページを開くことになり労力も変わらなかったです。

Q9 細分化したレポートが、取り組みにくい理由は何ですか。

(Q1で「細分化されていないレポート」を選んだ34名)



その他の意見

・高校講座を見るとなると、動画だから「重くなったり」「回線エラー」だったりで動かない・動きが悪いことが多かった。ならないほうがいいかと。

・レポートの細分化、というよりNOS上での高校講座の視聴がやりづらいです。一番大きいのはNOSの混雑の影響か動画を視聴中にNOSが落ちてしまい起動しなおさなければいけない時があります。また、続けて複数の放送を見たいときに一度マイスタディ→教科ページ→見たい放送と手間が多い。

・まだ放送されてない回のレポート範囲の学習を教科書を読みながら早めに取り組みたいときに、新規収録分だと放送視聴のログが取れないためレポートが表示されず、取り組みに遅れが生じる。

4. レポート評価比較

「数学Ⅰ」と「英語 CⅠ(旧カリ:C英語Ⅰ)」の2科目について、レポート評価比較を行った。比較をしたレポート回数については、数学Ⅰは全7回、英CⅠは全8回である。2021年度と2022年度のそれぞれの評価の人数と割合については以下の結果となり、それぞれの科目について教科担当の見解を踏まえ考察していく。なお、評価は A 評価が最も高く、順に B、C、D という4段階評価をつけている。

【数学 I 評価（人数）】

2021 年度

	第 1 回	第 2 回	第 3 回	第 4 回	第 5 回	第 6 回	第 7 回
A	407	515	415	359	324	187	332
B	218	122	186	184	208	204	176
C	42	28	40	62	61	103	57
D	27	17	28	50	44	117	43
計	694	682	669	655	637	611	608

2022 年度

	第 1 回	第 2 回	第 3 回	第 4 回	第 5 回	第 6 回	第 7 回
A	285	195	268	200	199	64	248
B	311	312	270	258	282	251	211
C	73	127	98	145	115	252	99
D	3	20	12	23	23	24	24
計	672	654	648	626	619	591	582

【数学 I 評価（割合）】

2021 年度

	第 1 回	第 2 回	第 3 回	第 4 回	第 5 回	第 6 回	第 7 回
A	58.6%	75.5%	62.0%	54.8%	50.9%	30.6%	54.6%
B	31.4%	17.9%	27.8%	28.1%	32.7%	33.4%	28.9%
C	6.1%	4.1%	6.0%	9.5%	9.6%	16.9%	9.4%
D	3.9%	2.5%	4.2%	7.6%	6.9%	19.1%	7.1%
計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

2022 年度

	第 1 回	第 2 回	第 3 回	第 4 回	第 5 回	第 6 回	第 7 回
A	42.4%	29.8%	41.4%	31.9%	32.1%	10.8%	42.6%
B	46.3%	47.7%	41.7%	41.2%	45.6%	42.5%	36.3%
C	10.9%	19.4%	15.1%	23.2%	18.6%	42.6%	17.0%
D	0.4%	3.1%	1.9%	3.7%	3.7%	4.1%	4.1%
計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

まず数学 I レポート評価比較については、スモールステップ法導入により A 評価と D 評価の割合が減少し（第 2 回 D 評価比較除く）、B 評価と C 評価の割合が増加した。

特に第 2 回と第 6 回の A 評価の割合が低いことについては、特定のユニットで評価を下げる生徒が非常に多く、結果的にレポート評価である A の割合を下げるようになった。具体的には、第 2 回レポートのユニット 2 では因数分解・たすき掛け、第 6 回レポートのユニット 2 では二次不等式を取り扱っている。

【英語 C I 評価（人数）】

2021 年度

	第 1 回	第 2 回	第 3 回	第 4 回	第 5 回	第 6 回	第 7 回	第 8 回
A	528	574	554	567	516	515	530	533
B	65	45	57	41	68	62	54	47
C	12	5	6	5	12	10	4	3
D	63	30	17	10	13	17	11	5
計	668	654	634	623	609	604	599	588

2022 年度

	第 1 回	第 2 回	第 3 回	第 4 回	第 5 回	第 6 回	第 7 回	第 8 回
A	448	441	498	515	533	460	522	429
B	171	178	114	72	68	127	59	141
C	32	16	16	24	1	9	9	7
D	6	4	6	7	3	4	4	2
計	657	639	634	618	605	600	594	579

【英語 C I 評価（割合）】

2021 年度

	第 1 回	第 2 回	第 3 回	第 4 回	第 5 回	第 6 回	第 7 回	第 8 回
A	79.0%	87.8%	87.4%	91.0%	84.7%	85.3%	88.5%	90.6%
B	9.7%	6.9%	9.0%	6.6%	11.2%	10.3%	9.0%	8.0%
C	1.8%	0.8%	0.9%	0.8%	2.0%	1.7%	0.7%	0.5%
D	9.4%	4.6%	2.7%	1.6%	2.1%	2.8%	1.8%	0.9%
計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

2022 年度

	第 1 回	第 2 回	第 3 回	第 4 回	第 5 回	第 6 回	第 7 回	第 8 回
A	68.2%	69.0%	78.5%	83.3%	88.1%	76.7%	87.9%	74.1%
B	26.0%	27.9%	18.0%	11.7%	11.2%	21.2%	9.9%	24.4%
C	4.9%	2.5%	2.5%	3.9%	0.2%	1.5%	1.5%	1.2%
D	0.9%	0.6%	0.9%	1.1%	0.5%	0.7%	0.7%	0.3%
計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

英語 C I のレポート評価比較については、スモールステップ法導入により A 評価と D 評価の割合が減少し（第 5 回 A 評価比較除く）、B 評価の割合が増加、C 評価の割合についてはレポート回により微増となった。

A 評価の生徒層が B 評価へと変化した理由については、先のレポート内容の改変例で述べたように、英語 C I はスモールステップ法導入に伴い、教科書にはない問題の作成や英作文問題の増加など、各回の問題の難易度をあげたことが理由として考えられる。

数学 I と英語 C I のレポート評価比較を通して、最も多いレポート評価 A の生徒層が少なくなり、レポート評価 D の生徒が少なくなったことが分かる。

A 評価の減少については、スモールステップ法導入により、これまで水面下にあった生徒の苦手問題についてより細かく評価をつけることができたことが考えられる。生徒自身が自分の苦手に気づき、また、再提出となったユニットについてはそのステップを超える必要が出てくることで、より生徒の学習を深めることができる。また、各教科担当は生徒の苦手問題についてより明確に認知できることで、試験問題の作成等にあたって、より生徒の学習効果をはかる教材づくりができるようになった。

D 評価の減少については、これまでのレポート1回分では学習量が多く感じられることがハードルとなり、レポートを作成、提出することに負担を感じていた生徒に対して、スモールステップ法導入が学習の意欲を向上させ、完了までの学習量の少ない1つのユニットへ集中して取り組むことができ、結果的に1レポート分の学習を進めやすくなったと考察できる。

IV まとめと課題

本研究では、「NHK 高校講座」視聴の「スモールステップ法（レポートの細分化）」を導入したことにより、学習意欲と学習効果が向上するという推察・仮説を立てレポート内容を改変した。

「スモールステップ法」を用いることにより、以下の内容で成果を上げることができた。

- ① 「NHK 高校講座」における、放送ごとの学習項目の配置が適正であることが分かった。
学習項目が指導要領を逸脱したものの場合は、この「スモールステップ法」を導入することが困難であった。
- ② 「スモールステップ法」を導入したことにより、生徒自身が取り組む時間も細分化することができた。このことにより、短時間でも NOS にアクセスする習慣が付き、学習を進める生徒が増加した。また、以前のレポートでは課題の量が多く、集中力が持たない生徒もいた。しかし、範囲が絞られた学習によって、集中して課題に取り組むことができた。
- ③ 今まで、レポート内容の範囲が広すぎたために、生徒の苦手分野や取り組ませる課題の内容自体の問題点に気が付きにくい状態となっていた。しかし、「スモールステップ法」により、生徒が苦手な分野を教員側でも理解しやすくなった。また、問題点がある課題などへの注意喚起や補足説明の資料などを作成・配布でき、手厚い指導に役立てることができている。

しかし、「スモールステップ法」を導入したことによるデメリットも存在する。

それは、単純なもので「画面の切り替え回数が多い」「添削依頼のボタンが多くなったので、確認が一度にできず面倒である。」などもあるが、「1つのレポートが多岐にわたるので、前に取り組んだユニットの見直しが大変」「NOS の混雑の影響か動画を視聴中に NOS が落ちてしまい起動しなおさなければいけない」などの声も多数上がっている。なぜ、「画面の切り替え回数が多い」「添削依頼のボタンが多くなったので、確認が一度に出来ず面倒である。」の声が上がってしまっ

たかに関しては、「スモールステップ法」の教員からの周知が十分ではなかったことが原因である。教員側もユニット単位での出題に慣れておらず、理解にばらつきがある状態で作成したことにより、学習効率が上がるには、どのようなユニットの構成にした方がよいかなどの考えに至らなかった。実際にあった事例として、以前まで用いていた紙ベースでのレポートを、大問毎に細分化を行った。このことにより、適正な細分化より、さらに細かく細分化されてしまい、画面切り替え(ユニット)が無駄に多く、課題内容を確認しづらい構成となってしまった。このことは学習者に大きな負担をかけたと考える。また、「1つのレポートが多岐にわたるので、前に取り組んだユニットの見直しが大変」という指摘に関しては、ボタン操作が多くなることにより、復習がしにくい状況になったと考える。改善方法として、次年度のシステム改修で、取り組んだレポートを紙に印刷できるようなシステムの実装を考えている。「NOSの混雑の影響か動画を視聴中にNOSが落ちてしまい起動しなかなければいけない」に関しては、提供開始直後に見られた状態で、NOS側のサーバスペースを見直すことで問題は解決した。

今後の課題として、現在の学習環境であるNOSは開発から7年が経過している。この間に、様々な学習環境の変化があり、学習を開始するまでの画面遷移などで改修を重ねており多少の増築感が否めない。2023年度には新しいネット学習システム(次期NOS)の開発を予定しており、2024年度の運用が始まるまでに、生徒が学習を始めるまでの導線の整理が必要になる。また、観点別の評価に関しても、現在は科目内での手計算での評価算出となっているが、2024年度以降は、全科目で「スモールステップ法」を導入することにより、ユニットあるいは設問ごとに観点別の評価項目を設けて、評価を確定することができるように対応する必要がある。

最後に、本研究での結果に関して、アンケート調査とレポート評価の比較などから、問題点はあるが、ある一定の効果があったということが考察できたことを報告する。